名古屋大学東洋史研究報告　三〇号　二〇〇六年三月発行

論説

一八五〇―一九四〇年山東省南部地域社会の地主と農民

荒武達朗

一　はじめに：中国共産党の出会った村落

中国共産党の土地政策史の概説的な叙述に従えば、中国農村社会では少数の地主が大部分の土地を占有し、地域社会を経済的・政治的に壟断していたという。一方で周知の通り一九三〇年代から四〇年代にかけて日中戦争下の華北村落を訪れた満鉄調査員らによる農村慣行調査とこれらに基づいた研究は、華北村落では共同性が次第に解体へと向かい、その結果ドライな人間関係が主流となったとしている。[1] 共産党の見解およびそれが依拠した資料にあらわれる所謂〝封建制〟の強固な残存、地主による農村支配の苛烈さ、それに統御される他の農民層といったイメージは、この満鉄調査にあらわれるそれとは大きくかけ離れている。このようにほぼ同時期の資料に異なる村落像が併存して出現するのはなぜだろうか。共産党が自らを正当化しその政策を補強すべく一種の宣伝として土地分配上の矛盾・地主による支配の恣意性を強調した、という側面も否定は出来ない。だが共産党の見解、その編纂した文献が全て宣伝によるものとは考えられない。なぜなら共産党が幹部を対象に配布する内部文献に虚構が含まれている可能性は低く、忌憚ない事実の告白、叱責、現状認識という性格が強いからだ。満鉄調査の村落像と共産党資料の村落像の間に存在するイメージの差異を、両者の分析の視点、調査の目的、あるいは調査者個人の資質等に求めることは危険である。共産党は確かに〝ある地域において〟強大な地主権力と彼らが君臨する村落に出会ったのである。

この強大な地主権力は何処で、そしてどの様に生成されたのか。この疑問に対する解答は実はそれほど豊富ではない。なぜならば共産党の革命の過程を題材とした諸研究では、打ち倒された地主の存在は所与の条件として取り扱われてきたからである。むしろ伝統社会から革命への道程を明らかにしようとする試みは、明清時代史から民国史にかけて、特に地主制度、民衆反乱等の分野の研究において膨大な蓄積があり論点も多岐にわたっている。これらの成果に依拠して一つのモデルを提示するならば、清代華北では商業的農業の成長につれて大土地経営は解体へと向かい小農経営の自立性が高まったと考えられている。[2] 大土地所有は常に存在してはいるが、彼らの取り持つ小作関係や雇傭関係においては身分的な隷属関係はもはや見られず、それは契約に基づく純粋な経済的関係に過ぎない。ではこれが一般的な潮流であるとしても、ある一部の地域には農民を経済的のみならず〝政治的〟にも支配する地主が二十世紀前半にいたってもなお強固に存在しているのは何故か。些か古びてはいるがこれに対して明快な解答を提示しているのが景甦・羅崙氏である。[3] 両氏の研究は本稿で扱う山東省を五つの区域に分け各地域の地主の性格を分析し村落の類型化を行った。先進的な魯北区(山東省北部・北西部)、済南-周村区(山東平原地方中部)、運河区(大運河沿い)では地主自らが商業的農業の直接経営に携わる。加えて商店などの兼営も行うタイプの地主も多く小農民の自立的性格も強い。反面魯西南区(山東省南西部・南東部)は商品経済の遅れが顕著であるとされ、大土地を所有しそこからの小作料収入を生計の主幹とする地主が多い。彼らは村落のその他の農民に対して強い影響力を及ぼし、経済外的強制を加えるという。[4] だが両氏が一つの地域として理解しているこの魯西南に着目すると実は魯西(南西部)は魯南(南東部)と性格を異にしている点に気付く。一八五五年の黄河の決壊で大運河は大打撃を受けたが一九一〇年代に至っても一部地域での流通機能は失われておらず、魯西の中心地済寧は集散地として繁栄していた。[5] ところがこの周辺には、経済的に遅れているとされる魯南と同様に地主が村落内の農民に対して強固な支配関係を構築していた。さらに山東省を南北に縦断する運河区の南部、魯西に近接した地域にも同様の状況を看取できる。[6] つまり魯西は魯南よりも経済的に発展しているが、当地の自家経営を主体とする農民は、小作関係の有無にかかわらず地主に政治的に支配され従わざるを得ない。

一見してこのように理解される村落内の社会関係の解明

には、その強固な地主支配の存在する地域のたどった歴史的展開を検討する必要があろう。そこで本稿は山東省南部の莒州（現在の行政区画では莒県と莒南県）[7]大店鎮近辺をフィールドとして強大な地主とそれに支配される農民の関係に注目し、地主を軸とした村落内の社会関係の出現から消滅までを考察する。この地主とそれ以外の農民との間に取り結ばれている関係、言わば「地主－農民関係」は土地の所有者と小作人という経済的関係のみならず、地主を彼らのリーダーとしてみとめ、それに対する畏怖・尊敬や規範意識に基づいてその下に結集していく関係である。満鉄の調査村落とは異なるタイプの村落を対象とし、性格の異なる資料をそれぞれ交叉させていくことで、近代の華北地域社会のすがた、地主と農民の関係をより立体的に描出できるだろう。なお筆者はこの大店鎮に居住する荘氏という宗族を対象に、その成長過程（拙稿一）、抗日戦争期における彼らと共産党の対立を時系列を追って論じたことがある（拙稿二）[8]。併せて参照されたい。

拙稿一によれば同地域は交通の要路から外れた丘陵地帯に位置し、商工業が未発達であり、地主層は土地購入に投資する傾向にあった。荘氏は山東省南部に普遍的に存在する大地主の中でも最大の部類に属する。伝説によれば彼らの始祖は明代洪武年間（一三六八－九八）にこの地に来住した。明代を通じての彼らの実態がどうであったかは定かではないが、農業経営者として財力を蓄えつつあったと考えられる。万暦年間（一五七三－一六一五）には族人の荘謙が科挙の進士科に合格したことから、この頃には地域のエリート層へ上昇したようだ。清代嘉慶年間（一七九六－一八二〇）以降はより多くの科挙合格者を排出し莒州地域社会第一の地域エリートと目されるようになった。表一は明清時代の莒州全体と荘氏の科挙合格者数をまとめたものである。嘉慶年間以降荘氏は莒州内で無視できない割合を占めている。民国期には全体で四万八〇〇〇畝を所有、一五〇あまりの地主家族に分かれていた。内、双柳堂と知松堂という二つの家族がそれぞれ一万二〇〇〇畝を所有して突出していたので荘氏内部での分化もまた著しかったといえる。[9]彼らは抗日戦争中に行われた減租減息運動と査減運動の下で攻撃にさらされ一九四四年五月に打倒された。この一九四四年から四五年にかけての共産党による地主に対する攻撃については二〇〇六年三月に公表する別稿にて詳論しているので参照されたい。[10]

表一　明清時代莒州の科挙合格者

	進　士		挙　人		貢　生	
	州全体	荘　氏	州全体	荘　氏	州全体	荘　氏
万暦	2	1	3	1	50	0
天啓	1	0	1	0	21	0
崇禎	3	0	3	0	32	0
順治	1	1	1	1	28	2
康熙	0	0	0	0	40	1
雍正	0	0	2	0	11	0
乾隆	1	0	13	3	59	5
嘉慶	2	2	4	3	32	6
道光	1	0	18	5	38	6
咸豊	3	1	6	1	15	2
同治	2	1	4	1	21	4
光緒	7	1	23	4	45	8
宣統					13	4

資料：『民国志』巻十・十一「選挙表」より。

参考：民国期高等教育機関卒業者及び留学経験者

	州全体	荘　氏
国外教育機関卒業生	16	7
国内大学及び専門学校卒業生	92	22 (3)
軍警学校卒業生	23	5 (1)
師範学校卒業生	42	5 (3)
高等学堂卒業生	3	1 (1)
高級中学卒業生	31	5
旧制中学卒業生	96	14 (3)
国内外学校卒業生	8	3

※（　）内は女性を表す
資料：『民国志』巻三二「経制志・教育」より。

二　地域社会の再編と「地主－農民関係」の強化：咸豊同治年間捻匪の襲来

莒州の地方志『乾隆志』（一七四二年刊）、『嘉慶志』（一七九六年刊）、『民国志』（一九三六年刊）[11]を検討したところ、前二者の記述は淡泊であり記事の大きな異動は見られない。[12]しかし『民国志』の記述はそれまでと大きく異なり、〝捻匪〟（捻軍など呼称は様々だが捻匪に統一する）の襲来に関する記事が豊富に見られるようになる。これは地域社会を大きく揺り動かした事件として、それから約七〇年が過ぎた一九二〇－三〇年代でもなお人々の記憶に残り語り継がれていた。[13]

捻匪は咸豊三年（一八五三年）に安徽省北部で反乱を起こし華北の広い範囲にわたって活動したとされる。ただしそれに先立ち各地で同様の反乱が多発していたので、これを安定的な地域社会に突如降りかかった災厄ととらえる理解は妥当ではない。一九世紀半ば不安定化していく華北地域社会の危機の最大のものが捻匪であったと考えられよう。この顛末は拙稿一で述べたとおりであるが、当地域では幅匪と呼ばれる集団がほぼ同時期に活動を活発化させており咸豊四年（一八五四年）に莒州を襲った。捻匪はこれらの集団と互いに影響しあいながら咸豊十年にはじめてこの地に襲来し、咸豊十一年さらに翌年の同治元年（一八六二年）と山東省南部を蹂躙した。同治六年に再来したがこの時には勢力を削がれており、鎮圧された。

かつてはこの捻匪を半封建半植民地という条件下、地主とそれ以外の農民との間にある階級矛盾の先鋭化によって発生した農民運動と理解する傾向が強かった。しかし拙稿一で論じたように捻匪の襲来は、特定の階級が難を逃れ得る性格のものではなく幅広い階層の人々にとっての脅威であった。それ故に本稿は莒州地域社会に生きる人々にとって咸豊（一八五一－六一年）同治（一八六二－七四年）年間の捻匪の襲来が地主を軸として地域住民を結集させる契機となったのではないか、との推測を立てている。『民国志』「軍事」の項目はこの時の情況を次のように述べる。

「咸豊十一年。……。（捻匪は）沙溝山に乱を避けた者に裕福な家が大変多いと聞いて、これを包囲攻略し、殺戮の限りを尽くした。屍が山のように積み上げられその山寨も焼かれてしまった。……。また（捻匪は）北に向かい玉皇廟の民寨を攻撃した。山には水がなく、包囲攻撃

すること三昼夜、多くの人が渇き死に、寨はついに守られず皆殺しとなった。県城の南の馬髻山では……近在の村々では引っ越してその上に住む者が多く、寨を結んで兵を整え防衛に当たった。……。（だが）寨はついに破られ殺された者は数えられず、泣き声は山や谷を震わせ、女性は多くが谷底に身を投じて殉死したのである。[14]」※

以下、（　）は筆者、〔　〕は原資料による注釈。

ここに見えるように人々は沙溝山、玉皇廟、馬髻山といった山地に「寨」を築いて立てこもったのだが、捻匪の攻撃の前に破れ多くの死者が出た。この時の殉難者は『民国志』の人物伝中に数多く立伝されている（拙稿一）。

さらにはいくつかの宗族はこれを契機に没落する事になった。

「わが張氏の族譜は……道光十九年（一八三九年）に惺堂祖さまが補訂されてから今に至るまで七十年余り、この（族譜編集の）事に関わろうとする者が無く、さらに咸豊同治年間に捻匪の乱、光緒年間にイナゴの害があり、わが張氏の故郷から逃れた者、亡くなった者、転々と居をかえて定まらない者は十の内二三あった。[15]」

この城陽（莒県城）張氏という宗族は、「わが張氏の族譜は先の清代康熙乾隆の頃にはじめて編纂され、二度目は嘉慶二年（一七九七年）に編纂され、道光十九年に菊農祖さまと惺堂祖さまが三度目の編纂をされた。それぞれの時間的な隔たりは四五十年に過ぎなかったので、輩行や支派の事については調査は比較的たやすかった[16]」というように四、五〇年に一度族譜を編纂していたのだが、捻匪の襲来を契機に結集力が弱化し事業を継続できなくなったと推測できる。表二から各世代の族人数をみると第十一世まではほぼ各世代二倍のペースで増加するが、十二世、十三世にかけては明らかにそれが鈍化している。さらに婚姻関係の取り結びは、地域における自らの立場を強化し宗族連合を結成し地域エリートになる上で重要な意味を持っている。張氏と地域の名族である大店莊氏の婚姻関係は、第十一世をピークとして数を減らしているので、大店莊氏は捻匪の襲来を乗り切って地域社会のエリートであり続けた（拙稿一）が、城陽張氏は没落し莊氏と婚姻の上で釣り合いがとれなくなったと推定できる。地域の有力者であろうと一般の農民であろうと、逃れられない危機が地域社会を襲ったのである。

では地域社会の人々はこの事態にどのように立ち向かったのか。咸豊同治年間の捻匪の襲来は前後わずか十数年程度の

表二　城陽張氏・大店荘氏婚姻関係

世　代	族人数	張→荘	荘→張	備　　考
5世	2	1	0	
6世	8	2	0	
7世	22	2	1	
8世	51	3	2	
9世	88	0	3	
10世	168	5	1	
11世	244	9	4	※捻匪襲来時に在世
12世	339	1	2	※捻匪襲来時に在世
13世	413	4	4	

資料：『重修張氏族譜』民国二十五年（張鐘岫『山東莒県「城陽東門裏張氏族譜」』台湾、1991年）より。

ことではあるが、たとえば淮北の睢寧県の事例では捻匪の襲来以前と以後とでは次のような変化をもたらした。なおこの資料は捻匪の乱を経験した古老を対象に一九五〇年代に行われた聞き取り調査によるものである。

「捻軍が通り過ぎたところでは、その前後で全く違う状況がみられた。捻軍が来る前に睢寧では県城を除いて圩は少なく、おそらく一つ二つの古い圩があったぐらいだ。捻軍が通り過ぎた後、新しくつくられた土の圩はとても多くなった。圩の形状は、土を掘って盛り上げて、上が狭く下が広いという土手の形をしていた。下には溝を掘って水を蓄え、敵が容易に超えられないようにしたのだ。[17]」

村を取り囲む土壁、圩[オ]（塢）（他にも「堡」「寨」とも標記するが本稿では「圩」に統一）が数多く出現したのである。この事態についてKuhn氏及びPerry氏[18]は捻匪の活動した地域において、在地地主層が軸となって村民を結集し地域社会の安寧と秩序を守ろうとする動き、言わば「村落の要塞化」「地域社会の武装化」が十九世紀後半に出現したと論ずる。ただし圩はこの時に始めて出現したものではなく、明末清初にも自らの生命と財産を守るべく建設されたという。[19] しかしその

後十九世紀半ばまで約二〇〇年間、圩に関する記述は華北の地方志に殆ど見られない。

さてこのような圩の建設の流行は、莒州においても共通する捻匪の襲来をはさむ社会の大きな変化であると考えられる。拙稿一でも引用したが莒州北部の名族管氏の管廷猷が記した「咸豊南匪擾莒記」（以下「擾莒記」と省略）[20]に詳しい顛末が語られている。

「（咸豊）十一年（一八六一年）二月、捻匪は北から南へ縦断して掠奪を働き、松明の火が百余里にも及び、馬隊と歩兵隊は数十万を数えた。当時平和な時代が長く続いたため、民は兵事を知らず、賊がやって来たのを聞くと、柔弱な者はみな山や谷の中に身を潜めた。県の豪傑で郷兵を訓練して団を作る者が十ほどあったが、多いとはいっても散漫であり紀律が無く、賊に遭遇すると逃げ去って抵抗しようとはしなかった。たまに勇敢な者がいて隊を組んで迎え撃っても、衆寡敵せず、敗北するほか無かった。」「ここで初めて、郷団・民団などの団練が頼みにならない事がわかった。そこで各自が〝建圩結堡〟して（砦を築いて）、身と家を守ろうとしたのである。（この内）山に砦を築いた者が八で、村に砦を築いたのは二の割合であった。玉皇廟山は枯渇に困しみ、馬髻山は間諜によって破られてしまった。」

豪侠たちが郷兵を集めて郷団をつくり捻匪に当たったが失敗した。そこで郷団が頼りにならないので各々が圩、堡、寨という要塞を築いて立てこもる事で対処しようとした。この内八割が山に逃げ込み寨を結んだが、前述の玉皇廟、馬髻山の例にもあるように種々の困難に見舞われる事となった。『民国志』「軍事」の項目に「警報が四方に発せられたものの、街の守りや民寨はそれぞれ協力せず独自にはかりごとをしていたために、賊の跳梁を招いた」とあり、[21]このような要塞が互いに連絡を取り合わなかったために賊の活溌な活動を許したのだともされている。また村に要塞を築いた残る二割の人々については「擾莒記」に次のように述べられている。

「その時、村に砦が完成していたのは、停溝、大店、張家荘、北杏、北汶の数箇村のみであった。この長となったのは、監生の于正修、道員の荘瑶、理問職銜の張遵箕、候選都司の王鳳岡、監生の王兆基等であり、何事も起こらぬ内に準備をして備え、郷里は皆これに頼ったのである。」

ところで彼らの内、北杏の王氏を除いた[22]大店の荘氏、張家荘の張氏、停溝の于氏、北汶の王氏、管家窰の管氏は、民国

期の地域の様々な事業に携わっている。[23] 彼らを莒州の地域エリートと考えて差し支えないだろう。さて、彼らは捻匪の襲来に先立って自らの村に圩を築いており、周囲の村人もここに立てこもって難を逃れた。そして咸豊年間の捻匪が去った後、莒州の村々に彼らの方法に学んだ圩が遍く建設されることとなったのである。「擾莒記」は次のように結ばれている。

「事態が収まってようやくそれぞれが山を棄てて村に帰り、村に拠って砦を築くこととなったが、その様子は星を散りばめたように州域にあまねく広がり、黄河の南、長江と淮河の北はみなこのようであった。同治六年（一八六七年）に太平天国の残党の任柱と賴文洸が山東を騒がした時のこと、官軍が四方より迫り逃げ道をふさいでしまい、ついには領域内に掠奪できるものをなくしてしまったために、賊は疲労困憊して捕らえられてしまったが、これは圩の力である。今日平和なときが続き、村々の圩は半ば崩れ落ちてしまった。しかし当時の人々が心を一つにあわせて、苦労して経営し、身と家を守って艱難を防いだということは忘れてはならない。故に村寨の名を左に記し、さらに『堅壁清野論』を付録とする。」

同治六年に捻匪が再来した時には村々に築かれたこの圩による防衛が効を奏した。この資料の末尾には村圩を建設した一一二箇村の村落名が列挙される。この資料は著者である管廷献を含めた地域エリート達の自讃の色合いが濃く見られるものの、在地地主層が中心となって周辺の村落、村民を結集し圩を築いた事実は重要であり Kuhn 氏と Perry 氏が淮北で論じた情況とも共通している。

以下「擾莒記」に名前の挙がる人物の活動について『民国志』の人物伝を基に検討する。

①大店莊氏「（莊瑤。……。末子の錫経は）そこで兄の錫縝とともに族老と合意をとりつけて村圩の建設を議し堅壁清野の計をつくった。[24]」

②張家莊張氏「張遵箕。……。本村において圩砦の建設をとなえ、堂姪（イトコの子供に当たる）の錦とともに心を尽くして計画し、協力して出資し、寄付を求めなかった。隣接する村からの手伝いは喜んで参加し、附近の乱を避けようとするのは八十箇村余りに至った。（圩は）今に至るまで高い壁がそびえ立っており、県城の東は今なおこれを頼りにしているのである。」「張錦、字は雲軒、張遵箕の堂姪である。……。捻匪の乱に際して巨額の寄付をして圩を協力して修復し、このあたりの者はこれに

頼って安らかに落ち着くことが出来た。[25]」

③停溝于氏「于春齢。……。咸豊十一年に捻匪が北方を騒がせた際に銭一万指しを寄付し、圩を建設し郷勇を訓練し、その辺りを守った。[26]」

④北汶王氏「王肇（兆）基。……。咸豊十一年安徽の賊（捻匪）が入境した際、郷人は北汶村が先の明代に乱を避けた所であったので、そこに圩を築いて賊を禦ぐ事を議し、肇基を推してその事を掌らせた。肇基は財産を傾けて寄付をし、日々工事を監督した。圩が完成すると遠近の赴くものは数万人に及んだ。[27]」

⑤管家窰管氏「これより前の咸豊十一年に捻匪が北方をさわがせた際、莒州がその攻撃にあったので、管廷猷の曾祖父奉政公は宗族・隣人を糾合し、村の東南八里にある影鶏山に砦をつくり防衛した。[28]」

これらの資料に①「村圩の建設を議した」②「本村において圩砦の建設をとなえた」③「圩を建設し郷勇を訓練した」④「圩を築いて賊を禦ぐ事を議した」とあるように地域エリート層が圩を築いていた情況を看取できる。⑤の管氏が山に砦を築き（それでも居住村落のかたわらにある）、また于氏の場合は不明であるが、その他はそれぞれの村に拠って圩を築いていた。なおこの地域防衛で活躍した①の荘瑶の孫、錫縝の子にあたるのが荘英甫という人物である。彼は後述し、また別稿で詳述するように一九四四年五月に大店の悪覇地主の頭目として闘争にかけられ、四七年に処刑された。またこれら地域の名族だけではなく、中小規模の在地地主層もまた同様に圩を築いて防衛に当たった。

⑥「陳学孔。字は景山、県城の東の車輞溝人の人である。清の咸豊年間に安徽の賊の乱が莒州に波及した際、これを憂慮して鳳凰山の土地数頃を寄付し、附近の各村に勧めて圩を建築し防御に役立たせた。咸豊十年冬に竣工し、名を鳳陽寨とした。当時これに頼って生きながらえた者は万を数えた。[29]」

⑦「趙訢。字は春煦。県城の東南の趙家葛湖の人である。捻匪が莒州の南を騒がせ被害は甚大であったが、郷民は防御を知らず、村を空にして逃亡し、道々にさまよった。村の東に鶴山があり、木々が鬱蒼と茂りそびえ立っており防御に適した険しさがあったので、趙訢はそこで山上に圩を築き防御に備えようと提唱した。（圩は）まもなく完成し、郷里の老いも若きもそこで始めて庇護を得たのである。[30]」

⑧「董漢江。……。咸豊年間に捻匪が到来し、里の人々は恐れおののき逃げようと考えた。漢江は土堡の建築を監督し、七昼夜で竣工し、粟二百石を出して人々に与えた。賊が至れば土堡に入って守り、去れば外に出て耕作し、郷里の人々はこれに頼って安らかに落ち着き、逃げさすらう者はなかったのである。[31]」

⑨「王綏之。字は效宣、山頭淵村の人である。心意気が立派で人に施すのを好んだ。清代の咸豊年間の捻匪の乱に際し、圩寨を築く事をとなえ、家産をなげうって人々の長となり、促して圩を完成させたので、人々は彼を推して圩長とした。防御の指揮はことごとく時宜にかなっていた。時に東山の玉皇廟の砦が破られ、逃げてきた難民がこの寨に集まってきたが、王綏之は率先して食料を施したため、生きながらえた者は一万人余りにのぼった。家産をかたむけて難を救う、郷里はその盛徳を称えた。[32]」

⑩「孫松。字は長青、県城の西の後岔河村の人である。……。咸豊八年に捻匪が山東を窺いまさに莒州に波及しようとした際、人々は圩を建築して逃げこみ守ることを議した。三十里舗は県城の西の巨鎮であり、岔河からとても近かった。圩を建設する事を議したものの力が足らず工事は幾度と失敗した。孫松兄弟が金二百を寄付して始めて完工し、また（兄弟は）独力で自分の村でも堡を築いて自衛しようとした。翌年捻匪は果たして到来し、人々を焼き殺し掠奪を働き、境域全体が騒然となったが、三十里舗および岔河の村や鎮だけが被害を免れたのである。[33]」

⑪「李膺昱。……。咸豊十年に命を受けて郷圩の監督建設を任された。泉子牌を測ると東西南北各々六〇里余りにひろがり、村は一三二ある。地勢を調べ、だいたい十里に一圩、二八箇の圩を建設し、各村の壮丁を選び郷勇を編成し、五日に一度観閲した。[34]」

地主層は、むろんその地方志にあらわれる記述の内容を割り引いて考えねばならないのだが、私財を投じ村民を結集して山や村に圩を築いたようだ。これらの中でも事例の⑩⑪及び先に見た②④も同様に、必ずしもその村落だけに限らず、周辺の村々も巻き込んで村民の結集をはかったようである。推測の域を超えないが、これはその地主が影響を及ぼすことの出来る勢力範囲に等しいといえよう。傍証として、後の抗日戦争中に共産党が群衆の力によって打ち倒した悪覇地主が所謂「封建的支配」を及ぼす範囲が、大きなものでだいたい

二、三〇、小さいもので一から数箇の村落とされた。[35] これは彼らの小作関係の拡がる範囲とも重なる。

これまで述べきたったように捻匪という地域社会に生きる者すべてにとっての脅威に対抗すべく、地主は結節点となって地域防衛にあたった。「擾莒記」の文末に附される「堅壁清野論」は防衛において指導者の農民に対する強力なリーダーシップを必須のものとしている。[36] この関係は必ずしも地主による強制によってもたらされたものではないだろう。敵対し合うというよりは地域社会の安全を破壊し、階級に関わりなく生命と財産を危機に陥れる事態に対処すべく、生存のために地主－農民関係を強化したものであった。本稿「はじめに」でも述べたように、この関係が小作関係という経済的なものに限定されないことは容易に看取できよう。分散傾向にあったかもしれない村落内の人間関係もこれを契機に互いに強く結びついたのではないか。

さて問題はこのような地主－農民関係が捻匪が去った後も解消されたとは言えない点にある。捻匪の襲来とは地域社会にとって極めて異常な出来事であった。前出の「擾莒記」にみえる「今日平和なときが続き、村々の圩は半ば崩れ落ちてしまった」という記述のように平和が続くとこのような圩も崩れるにまかせられ、このような組織も捻匪前のように弛緩してしまうのではないか。しかし馬場毅氏によれば、[37] 地域が混乱に見舞われた時期にはこのような組織が再び在地地主層を軸として再編成され出現するという。当地域でも以下の事例を見出すことが出来る。

「張士鸞。字は翥卿、県城の北の荘家村の人、光緒戊申（一九〇〇年）の貢生である。……。義和団事変の時、莒州には隠れた賊が多かった。張士鸞は民団をおこし地勢をはかり防御の計とすることを提唱した。小舗村にはもともと圩があったが、長い年月が経って修繕が行われなかった。人々は張士鸞を推して圩長とし、資金を献じて武器を備え木や石を購った。各村は資金を捻出し工事を手伝う者は日に千人に上り、しばらくして完工し、人々はことごとく心服した。……。民国元年、また推挙され北汶鎮の圩長となり、遠近の者はこれを仰ぎ、郷人は頼みの綱とした。享年九〇歳。[38]」

以下は山東省中南部で広く活動した茹素道という会門（宗教団体）についての記録である。この会門は後に国民党側の立場をとり日本に敵対した。会門については次節にて論ずる。

「民国十年頃、軍閥が割拠し恣に税金を取り立て人々の

暮らしは立ち行かなくなり土匪が蜂起した。先生（夏聖哲、茹素道のリーダー）は見張りを強化し助け合い、囲寨を建築し、自衛団を組織し、そして匪賊の害を禦ごうと提唱したところ、附近の裕福な家はその村に居住し安全を保った。[39]」

例えば清末から民国初年にかけて当地域では、むろん捻匪ほど大規模ではないが、匪賊の横行が顕著となる。この時にもやはり地主とおぼしき人物が再び農民を結集して圩を築いたのである。張士鸞の資料に「小舖村にはもともと圩があったが、長い年月が経って修繕が行われなかった」とある。おそらくは捻匪後に危機が消滅するとともに結集力は弱まり圩は崩れていたのだが、危機の再来は再び農民を結束させたのである。

「民国十六年、匪賊の頭の史義成は敗残兵の呉海峯等を糾合して臨沂の馬蹄湖一帯の村々を占拠した。時に国民党軍は沂水を包囲し、県長の田立勛は逃げ出しており、各処の村々はどれも守りとする圩寨がなく、匪賊は何度も闖入した。……。王海三はこの情景を見て匪賊を除いてはじめて家を保つ事が出来ると考え、そこで各村の壮士を集めて利害をはっきりさせ、一七〇人余りを得た。[40]」

一九二〇年代には軍閥混戦と匪賊の跳梁が当地においてピークに達する。この時「各処の村々はどれも守りとする圩寨がなく」というように圩はなくなっていた。王海三は、圩を建設したかは定かでないが、壮士を集めてこれに対処したという。先の張士鸞の資料にもあるが、地域防衛と圩の建設の強い関連性もまた窺える。莒州からやや西の沂蒙山地を訪れた日本人の記録には、

「沿道の山頂には殆ど一として城寨の設あらざるなく、行人をして奇異の感を催さしむ。是れ長髪賊の乱後住民万一を顧慮し産を傾けて築造せる所に係り、昨年土匪襲来の際は之を利用したりと云うも、平時は交通不便の山頂の事なれば住居するもの絶えて無し。[41]」

という事例がある。長髪賊は捻匪を指すものであるが、この時期に当地では山の頂に要塞が築かれ、その後の混乱においても使用されたことが窺える。

以上、捻匪の襲来を契機にもたらされた村落の要塞化、地域社会の武装化は時として弛緩はするが根底では維持され続けたと考えられる。繰り返すがそれは捻匪の襲来によって再編、強化された地主－農民関係の〝維持〟と言い換えることが出来る。人々は生きる為に自発的にその地主の下に結集し、

後の混乱の下でも凝集し続けたのである。以下、この問題をより具体的に理解するために節を改めて、一九三〇年代末から四〇年代半ばにかけて共産党という外来勢力と地域社会の衝突を題材として検討を進めたい。抗日戦争は、地域社会に降りかかった生命と財産の危機であった。そこに住む人々はこれにどのように対処したのだろうか。共産党や国民党は、危機を持ち込んだ日本軍を排除すべく抗日を遂行し、この点では人々の利害と根本的な矛盾はない。では人々はこれらの外来勢力に容易に結びついたのだろうか。

三　一九三〇－四〇年代山東省南部地域社会と外来勢力：地主・農民・共産党

拙稿二でもみたように歴史的事実として共産党は地主層に攻撃を加えてその郷村での政治的・経済的力量を奪う事で地域社会を掌握した。一九三〇年代の末、共産党は根拠地を拡大していく上で不可避的に彼らと向き合わねばならなかった。彼らが地域社会への浸透を開始した直後の三九年、共産党の工作は失敗し深刻な打撃を被った。党史では托派（トロツキスト）幹部の粛清事件と位置づけられるこの傾向は地域社会に波及し地主への無差別攻撃という様相を呈した。結果、広汎な農民層全体の反感と忌避を生み出してしまった。所謂〝左〟の誤りとされるものだが、背景には共産党の以下のような当地への認識不足を看取できる。

現在に至るまで共産党の概説的説明に依れば、地主と農民との関係は、対立的なものであるとされている。[42] この地主による郷村支配の苛烈さと残酷さという論調は、一部では共産党到来以前の観察者にも共有されている。恐慌の影響がいまだ農村に深刻な影響を及ぼしていた一九三四年に故郷の莒県に帰省した李鼐氏によれば、当地の小作制度は収穫物の五〇％という高い小作料を課すものであるばかりか「食料一斗をかりれば三斗を返し、種子一升を借りれば五升を返す」[43] というように小作人にとって著しく不利なものだった、という。

しかし表三のように一九一〇－二〇年代にはこの地域の特産の落花生は価格を急騰させており、この状況は必ずしも生産農家にとって不利であったとは言えない。一例を挙げよう。山東農村が好景気に沸いた一九一〇年代から二〇年代にかけて編纂された日本の青島守備軍の調査資料には、一九三〇年代の数多くの資料に見られるような農村経済の破綻という悲

惨さを見出せない。ここに当地の落花生について次のような記述がある。

「本県（莒県）下落花生の栽培は、商務会員の説に拠るに、前清光緒二五、六年（一八九九、一九〇〇年）に始まり、爾来長足の発展を為し、以て今日の盛況を致せり。吾人の通過地方に於ても山辺河濱の砂礫地帯には必ず之が栽培を見ざるなく、其の産額は蓋し莫大の額に上るべし。」

「（蒙陰県）落花生は実に当地方の開発に少からざる好影響を与えしものの如く、商務会長の談に拠るに、十数年前〔未栽培時〕一畝地八吊文の土地は三十吊文に、三十吊文の土地は百吊文となれりと云う。大凡県下の砂地及び山地には殆ど之を産せざるなく、之が為最近地方の富力著しく増進せり。[44]」

このように高騰を続ける限りは人々は落花生の栽培に傾斜し、それ故に土地購入・借入や農業経営への投資も拡大する。そこからの高収入が期待される以上は、経営の拡大の為には所謂高率の小作料・利率も受容される。李鼐氏も、当地域の農村経済・農家生計の破綻の原因を土地制度のあり方にではなく、むしろ恐慌のあおりを受けた落花生価格の暴落にもとめている。[45]全ての商品もまたその影響を受けて値を下げたが、落花生のモノカルチュア化を進めていた当地の農村経済にとっては、収入源の減少と経営拡大の為に負ってしまった債務を返還する道が絶たれることを意味する。

恐慌の波及は山東省農村にとって大きな打撃であった。しかし農民はそれ以前から存在していた土地制度が問題とは考えないだろう。つまり他に選択肢のない（その存在を知らない）、また納得できる（納得せざるを得ない）状況におかれれば、地主－農民間の対立の先鋭化は、消滅はしないけれど

表三　穀類価格の変動（百斤当）

単位：千文

	小麦	高粱	落花生
1912	11	8.6	7.2
1913	10	8	17
1914	9.4	7.6	16
1915	9.2	7.8	12
1916	11	8	12
1917	10.05	8.6	12.8
1918	15.3	11	12.8
1919	9	5.6	13
1920	9.34	6.8	13
1921	10.02	8	25
1922	13.2	11.4	26
1923	13.6	12	20
1924	17	14.4	25
1925	23.4	20	35
1926	47.6	38	45
1927	46.8	44	43.6
1928	53.5	46	58.2
1929	48	38	51
1930	48	32	56
1931	38	29.6	52
1932	40	30	49
1933	32	28	29
1934	36	20	32
1935	45	30	52

資料：『民国志』巻三八「民社志・農業」より。

も表面化するとは考えられない。その下では地主とその他の農民が常に対立する関係であったとは必ずしも言えない。後、一九四二年の抗日戦争中の資料となるが、[46] 包囲下におかれた共産党政権は地主から食料を調達して春荒を乗り切る為、地主に対しては借りたものは返すようにした上で、さらには救済の美名があるならば、拒否されることはないだろう、と分析した。この背景には地主が農民を収奪する一方ではなく、困難な時期には生存のために食料を放出する慣行の存在、相互依存関係も成立する地域社会のあり方を見いだせる。

一九三九年の共産党のこの地域での失敗は、このような地主に農民が一面では依存しているとの事情を理解していなかったことによって発生したのだ。その内容を見てみよう。

「(一九三九年以前の工作の状況) 第四、当時封建勢力は相当に濃厚であり、特に魯南一帯では、普通の地主はみな政権を有し、武装を有しており、群衆工作の展開にとってすでに重大な障害となっており、甚だしい場合にはいくらかの頑固な地主勢力はひとたび工作が始まるや我々の群衆工作と対立し、我々の群衆工作を直接鎮圧したのである。[47]」

「また例えば我々の土地政策・経済政策は左に過ぎ〔例えば地主の地権を侵犯、労賃を上げさせるが増産しない、小作料を下げるが小作料は納めない、負担過重など〕、地主・雇い主が我々に恨みを抱くばかりでなく、基本群衆も打撃を受けた〔小作関係の解除、解雇など〕後には我々に恨みを抱くようになった。」「さらには我々のスパイ摘発政策も重大な誤りを犯し、人は戦々恐々として我々に反対する者が増え、土匪会門は間接的に勢力を広げる事を得、根拠地は強固でなくなった。[48]」

当初共産党は地主を打倒しさえすれば自動的に農民の支持を得られるものと考えていたのだが、農民はむしろ地主との関係を選好しこれに強い拒否反応を示した。同時期国民党も魯南地域社会への浸透を図るが、共産党と同様の困難に遭遇している。[49]

加えて事態をより複雑にするのが、当地において共産党に敵対する勢力の並立である。表四に当地域における抗日戦争中の日本軍、国民党、共産党の活動をまとめた。日本軍は一九三七年七月華北へ、同年冬には山東省南部に侵攻した。莒県は四五年五月まで独立混成第五旅団下の独立歩兵第二十大隊の警備担当区域とされる。共産党もまた三七年の冬から三八年春にかけて魯南での活動を活発化させ、三八年十二月

表四　抗日戦争期莒南における日本軍、国民党軍、共産党軍の動向

○日本軍

独立歩兵混成第五旅団（莒県）下、独立歩兵第二〇大隊（－1945年5月）	
第一中隊（管飾鎮）、第二中隊（莒県）、第三中隊（諸城）、第四中隊（日照）	

資料：大澤泉『華北の精強部隊：独歩二十大隊史』1989年、鈴木忠一『部隊戦史（一）厚い戦塵』北支派遣独立歩兵一九三大隊、1976年。

○国民党軍・国民党省政府

1938年6月－12月	騎兵第九師　大店に駐留。
1939年3月	五七軍一一一師　莒南東部の柳溝・址房・宋家溝に駐留、日本軍と交戦。
夏秋	国民党山東省政府　魯南へ移駐。
1942年1月	魯蘇戦区　魯中より莒県甲子山地区（李家彩・石汪村等、後、大店）へ。
2月	国民党蘇魯戦区総司令于学忠とその指揮部　魯中より甲子山区　李家彩、石汪村一帯に移駐。
8月3日	五七軍一一一師　共産党側への寝返り。
8月6日－19日	第一次甲子山戦役　八路軍と交戦、拠点甲子山区を奪取さる。
8月12日	日本軍　莒南県一帯で掃討。国民党軍于学忠部　北へ撤退。
10月11日	第二次甲子山戦役　孫煥彩が甲子山区を再占拠。
12月16日	第三次甲子山戦役　八路軍に甲子山区を再奪取さる。
1943年春	魯蘇戦区　当地より撤退。
7月	国民党山東省政府　安徽省北部阜陽へ撤退。

資料：山東省莒南県地方志編纂委員会編『莒南県志』斉魯書社、1998年、第十九編「軍事」。
劉道元「抗戦期間山東未曾淪陥」「山東文献」12-2,3,4、1986年、李継昶「八年抗戦之山東」聯友書社、1946年（再版：台中、1996年）。

○共産党の展開（含：日本軍の掃蕩　国民党軍との協力と摩擦）

1937年8月	十字路抗日遊撃隊　組織される。
12月	同遊撃隊　中共の指揮下で改編。
1938年3月2日	日本軍　大店攻撃。
4月25日	日本軍　十字路攻撃。
5月	八路軍山東抗日遊撃第四支隊莒県独立営設置。
7月	八路軍山東抗日遊撃第四支隊　沂水より莒南の岳家溝、良店、十字路、相邸、涑辺、壮崗へ。岳家溝で山東抗日遊撃第二支隊に改編。
8月	中共魯東南特委　大店にて成立。中共莒県県委　岳家溝にて成立。後、第二支隊と共に大店に移駐。
	臨沂晋修仏教会　農民抗日自衛団を組織。
10月	同自衛団　八路軍山東抗日遊撃第二支隊独立営に改編。
11月18日	莒県独立営　第四支隊二団第一営に改編。
1939年6月	中共魯東南特委　旧莒県・莒贛臨辺区分割を決定。
7月	莒南県委　高家溝村にて成立。
	日本軍　大店を攻略。
8月	莒南県大隊（第二大隊）成立。
10月	莒南県代表大会　郁家結荘で開催。この年、中共莒南県委　金鐘罩（会門の一つ）を利用して抗日武装勢力を育成。
1940年1月24日	莒南県大隊　国民革命軍五七軍一一一師と共に日本軍を攻撃。
3月	莒県抗日民主政府成立。
9月22日	国民革命軍五七軍一一一師師長常恩多、三三三旅旅長万毅　頑固派の五七軍軍長を包囲。
9月	八路軍山東縦隊魯東南部隊　大店、碑廓、沈疃の日本軍を攻撃。
10月	山東縦隊二旅五団　臨沂にて反共自衛団を攻撃。
11月	国民革命軍五七軍一一一師、三三三旅　大店を攻略。
1941年2月17日	三三三旅旅長万毅　頑固派孫煥彩に逮捕さる。
1942年2月24日	日本軍・偽軍　址房、潘店、柳溝等の五七軍一一一師、蘇魯戦区総部を攻撃。八路軍と地方武装勢力は友軍と協力。
2月	大衆日報編集部・印刷廠　莒南へ移駐。
3月23日	中共山東分局の決定　魯中区五地委と魯南区四地委を合併し濱海地委を設立。
5月	中共山東分局の決定　莒南県を減租減息運動の実験中心県とする。
8月3日	国民革命軍一一一師師長常恩多　拘禁中の三三三旅万毅を解放し起義。頑固派を逮捕。後、解放区へ移動。
8月12日	日本軍　莒南県一帯で掃討。　国民党軍于学忠部　北へ撤退。
8月6日－19日	第一次甲子山反頑戦役　国民党一一一師頑固派孫煥彩と交戦。八路軍　甲子山区を奪取。
10月11日	第二次甲子山反頑戦役　頑固派孫煥彩　甲子山区を再占拠。
12月	一一五師教導五旅　蘇北より莒南へ転戦。
12月16日	第三次甲子山反頑戦役　八路軍　甲子山区を再奪取。
1943年2月2日	日本軍　十字路、温水泉を攻撃。
6月17日	民兵と主力部隊　鶏山の土匪を攻撃。
9月	莒南県戦時指揮部　反掃討緊急動員令。
10月	日本軍　朱家洼子を爆撃。
1944年1月24日	石溝崖の土匪拠点を攻略。
3月	蚕滅工作団　大店に進駐。
5月28日	大店荘氏を対象とした蚕滅大会。
8月19日	日本軍・偽軍　濱海区を掃討。
8月下旬	日本軍・偽軍　筵賓、涑辺、蛟山、団林などを掃討。
1945年1月10日	日本軍・偽軍　壮崗、蛟山、涑辺等区を掃討。
5月	日本軍　十字路、朱家洼子、演馬荘、大店を掃討。

資料：山東省莒南県地方志編纂委員会編『莒南県志』斉魯書社、1998年、「大事記」。

には山東分局を設置した。旧莒州地域においても同年八月大店鎮に中共魯東南委・莒県県委、三九年七月には莒南県がそれぞれ設立された。大店鎮は当地の共産党の中心拠点となる。国民党は済南が陥落した後各処を経て三九年に省政府を魯南へ移転させた。[30] 四二年一月には魯蘇戦区が魯中より魯南、大店鎮の東方へと移駐した。当地域では、これら日・国・共の三勢力が全て徒歩で半日程度で行くことの出来る非常に狭い範囲内において混戦状態にあった。

日本軍はしばしば国民党・共産党支配地域に掃蕩作戦を展開し、一九三九年七月には大店鎮を占領するまでに至るも後に四〇年十月には親共産党の国民党軍五七軍一一一師と三三三旅によって奪還される。このような国共共闘の例はむしろ稀であり、両者の間では一般的に「摩擦」という衝突が発生していた。四一年冬の第二次魯南作戦頃の戦況について独立歩兵第二十大隊長田副正信大佐の回想に「魯南地区の共匪は、元来地下工作に専念し、表面は活溌な行動は行っていなかったが、昭和十六年春ごろから、我が方の注意を引き始めた。日本軍警備地の近くには、土匪や蒋系遊撃隊が多く、共匪はわが方から離隔した地に蟠踞していたので、わが討伐の対象も勢い蒋系軍とならざるを得なかった。国共相剋は全般としてはそれほどでもなかったが、小部隊間では激烈なものがあった」[31] とある。四一年冬では当地域の日本軍の交戦相手が国民党であったことは興味深い。第十二軍参謀大橋武夫少佐の回想は「この地区周辺の蒋系軍は著しく勢力を失墜していたが、国共相剋は依然として続いていた」とあり、国民党軍は四一年頃までには勢力をそがれつつあったが、[32] 共産党の宣伝するように同党が日本軍への抵抗を放棄していたわけではない。

共産党にとっては一九四二年から四三年上半期にかけてが著しい困難の時期であった。ところが四三年春夏にかけて国民党省政府、魯蘇戦区が安徽省へ撤退したこと、同年冬に日本軍の掃蕩作戦が失敗したことが転機となり、共産党の客観的な優位が徐々に確立されていった。拙稿二で論じたように、この軍事的情勢の好転の下で土地政策が実施された。しかしながら現在の視点に立てば自明の事である共産党の勝利も、当時の人々にとっては必ずしもそうではなかった。弱体化していたとはいえ四五年まで国民党軍が日本軍と戦うケースが見られた。[33] 互いに敵対する三勢力が地域に混在するという情況は戦争が終わるまで続いた。人々は不確かな情報と推測に基づいて自らの方針を決めねばならなかった。

この状況下で地域住民はどのように行動しただろうか。日本軍、国民党、共産党はそれぞれが相手の勢力をそぎ自分の側を充実させようとしている。例えば日本軍は根拠地の縮小を目的に懐柔や強迫で住民を引き寄せようと試みた。一九四二年冬の『大衆日報』（当地で発行されていた山東分局の機関紙）には次のような記事が見られる。

「敵が偽化（傀儡化）政策を行う中で、最も悪辣なのは一種の形を変えた『並村』（村落併呑）の陰謀である。我が根拠地内の群衆を誘惑強迫し敵の拠点或いは占領区附近へ転居させるのだ。我が占領区を縮小し我が大衆を獲得し、我が資源を大量に掠奪し、我が抗日の力量を窒息させ、我が根拠地建設の基礎を打ち砕くのだ。[54]」

この蚕食作戦を一環とする掃蕩作戦全体で、日本軍による残虐行為が行われたことには疑いの余地はない。それに対する怒り、恐怖が人々を共産党側へと結集させ、抗日へと向かわせたというのも真実であろう。だが誰が勝利するのかという問題は重大な関心事ではあったが、その場に居合わせた者にとってはそれに明確に答えを出すことは出来なかった。この状況下で人々は容易に共産党側に依附するだろうか。

さらに人々を動揺させるのが謡言であった。一九四一年冬の『大衆日報』の記事には次のようにある。

「敵の今回の『掃蕩』は軍事的進攻だけではなくいわゆる軍事、政治、経済、文化、特務などの一元化した総力戦である。特務やスパイ分子はさらには敵の『掃蕩』の先遣部隊なのである。敵が『偽化運動』を実行する今、スパイ活動はさらに活溌になっている。故にスパイ活動の厳しい取締は反『掃蕩』勝利を勝ち取る切実なる任務となった。……。これら（様々な謡言）は全てスパイの恥知らずな作り話、破壊行為であり、その意図は民衆を動揺させ威嚇し投降させる事にある。同時に慈善的な顔つきを装い、民衆を騙し帰宅させ、日本軍のために拠点を『強化』し、また利益で民衆を懐柔して秘密を報告させ、併せて我が軍民関係を離間させ、我が団結を分散させるのである。……。[55]」

スパイが根拠地内に謡言をばらまき、その対策に苦慮する共産党の姿が見える。根拠地内の、共産党の政策に好意的でない地主自体がその発信源となる場合もあった。一九四二年夏根拠地建設・強化を目指し地主との「連合抗日」を唱える共産党が、その協力と理解を求めて出した呼びかけの中には次のような下りがある。

「その他にもいくらかの地主・士紳は……同時にまた様々な事実に合わない事実と異なる宣伝をし、さらに侮蔑し破壊しようとしているが、これらの事実に合わない事実と異なる宣伝に対しては私たちも一々列挙して、我々の見解を出し皆さんの参考としたい。[56]」

例えば「共産党の現在の優位は一時的だ」「日本軍の次の掃蕩作戦はより大規模で持ちこたえられない」「国民党軍が勢力を盛り返して帰ってくる」「追い出された地主が還郷団を組織して帰ってきて復讐するだろう」というような流言飛語が根拠地内を飛び交った。これらは根拠はなかったが、未来の見えない状況の下で人々の不安をあおり、それ故に共産党に従おうとする動機付けは小さくなった。それは国民党、日本軍に対しても同様であり、地域住民は三つの勢力の間で動揺し支持を転々と変えたのである。

極端な事例では、ある村落のリーダーと目される人たち（おそらくは地主）は共産党への復讐の為に日本軍を村内に引き入れた。以下の資料は四二年秋に出された呼びかけにみられるものである。

「今敵は『掃蕩』しようとしており、彼ら（地主）はそこで機会が来たと考え、敵の力を借りて報復しようとした。この種の事は臨沂県においてすでに一箇所発生していた。」「事実上敵は我々の為に問題（雇主と雇工間の衝突を指す）を解決できるのだろうか。昨年の沂蒙大『掃蕩』時の牛王廟の事件を見てみよう。七人の老人が酒席を並べて敵を歓迎し、敵が彼らの為に問題を解決してくれると思ったのだが、結果はみんな敵に火の中に放り込まれて焼け死んだのだ。[57]」

故に日本軍に頼るという事はしてはならないとの警告であるが、抗日戦争下地域住民の動揺の生々しい事例を窺い知ることが出来よう。

また別の例を紹介する。ある村落は共産党・国民党のいずれにも与しなかったが、日本軍とも敵対し会門（宗教団体）の指導下で日本軍を攻撃した。以下の資料は国民党側の立場をとり日本軍と共産党に対抗した人物の回想録である。

「民国二七年（一九三八年）十一月、日本兵一箇大隊約五百人が砲二門を携えここ（臨沂近くの山間部、東流という村）を通過しようとしたが、村民は固く寨門を閉ざして通行させなかった。ついで発砲し何人かの日本兵を撃ち殺した。そこで日本軍は村内に砲撃を加え、激戦が発生した。[58]」

しかし日本軍と戦ったとはいえ、彼らの行動が中国対日本という、あるいはナショナリズムの発揚という構図から導き出されたかどうかは疑わしい。なぜなら一方でこの黄旗会という会門は同じ時期に国民党系抗日団体の聯荘会を攻撃しているのだ。

「民国二七年冬、……、会主の後を嗣いだ全という姓のものが突然黄旗会の一部の会衆約百人を糾合し、山間部から出てきて小山前の聯荘会（国民党系）を駆逐しようと企図した。[59]」

この聯荘会は、国民党軍により臨沂方面の守備司令を任ぜられた王洪九によって結成されたものである。王は日中戦争以前には当地の人民自衛団の一員として地方の治安維持にあたっていた。なお彼はその強い反共的行動により共産党側では漢奸と評されている。

このような会門に抗日というナショナリズムを見出すことは困難である。共産党・国民党共に会門対策に腐心し、自らの側へ引き入れる努力をしている。[60] 彼ら会門の動向の行動原理について劉少奇は次のように分析している。

「彼らの領袖は大多数が豪紳であるが、農民の遅れた狭小な自己の利益に迎合するので、非常に強固に団結することが出来、迷信は農民を団結させる一種の方法なのである。〔聯荘会は迷信がないので比較的よい〕。彼らは一切の問題に対して自らの利益から出発し、誰かが彼らを騒擾し掠奪すれば、彼らはそれに対して反対し、解決をしようとする。それが日本軍、偽軍、抗日軍隊或いは政府、土匪、如何なる党派であるかは関係ない。彼らは政治の立場では中立なのだ。[61]」

会門は豪紳・地主の指導下で農民の個人的な利益に迎合、自分たちに害を加えてくるものがあればそれに抵抗する。当地域の事例ではないが山東省北部黄河下流域のある会門について日本軍側の資料に次のような記録がある。

「山東省北部武定道の徳平、臨邑、商河付近に勢力を張っていた紅槍会系匪軍約八〇〇〇は、事変後一旦国府軍に改編されたが、中共側の内部工作により赤化し、魯北地区遊撃隊となった。しかし独立混成第七旅団の工作により、昭和十六年春、日本側に帰順し、皇協部隊となった。十八年春ごろ、日本軍の警備部隊が兵力集結のため撤退を始めると再び中共側に寝返ったので、十九年三月、日本軍の手で内部を粛正した。この部隊は終戦まで日本軍と連絡しつつ同地付近の治安維持に任じた。[62]」

この会門は国民党から共産党へ、それから日本、共産党、最後に再び日本と、めまぐるしく依附する団体を替えている。彼らは自分自身の安全と利益を最優先にして行動し、外来勢力との関係は最も有利と見えるものを選んだのである。

今一度確認しておかねばならないのは人々が会門などの形式を取った在地地主の統制下にあったということである。大店鎮の荘氏は「地主は会門を組織し、自らは会頭となる。荘英甫、荘屏舟等の如きは念二輩の三番子（具体的な内容は不明）であり、これによって貧しい人の階級認識を覆い隠し、その搾取関係を飾り、群衆を統治する目的を達成する。会門が敵や頑固派に利用されるようになれば、群衆はさらに甚だしい害を受ける[63]」というように会門のリーダーとして人々を支配していたという。

共産党によれば、群衆は会門によって階級意識を覆い隠され、搾取されていることに気付かない。故に地主は容易に農民を統治できる、という。これは共産党の文献が「麻痺」あるいは「麻酔」「覚悟不明確」（階級意識がぼやけた）と表現する心性であった。以下の資料は四四年夏に大店荘氏が打倒される前に、農民を対象に行ったと見られる調査である。

「大店の群衆は長い間地主の欺瞞と圧迫の下におかれ階級的自覚は普遍的でない。……。（ある農民に）話題を変えてまた尋ねた『何故地主は一年中、一生の間労働しないのに、しかし食べる物はよく、着る物はよく、すむ所もよいのか？』彼の第一の論法はこうである。『あの方は大官になられたことがある。当初の大店では十二の駕籠が出たり入ったりしていた。金がないってことがあるかね。』第二の論法はこうである。『あの方は大商いをしているので金を儲けないってことがあるかね。』最後には結局『あの方は運がいいのだ。祖先は、、』に至るのだ。『あなたにやり様はないのか』と聞くと、彼は『あくどい事をするか土匪になるのでなければね。でも私には出来ない』と答える。これは一般的な現象を代表しているものではないが、しかし総じて一般群衆の階級的自覚の不明確さを見ることが出来る。故に階級的自覚の啓発はやはり基本問題なのである。[64]」

以下の資料は、四二年の連合抗日の際地主を招待した座談会の席上で大店荘氏の中の開明地主である荘佐臣の発言によるものである。

「彼（荘佐臣）は次のように発言した。『一般的には地主は搾取階級で思想は遅れており行動は保守でただ自分の

利益のみを心得ている。』『頭がよくやり手の地主は見識が深く、郷里で相当の身分と地位を有しており、常に人は彼にお願いして困難を除き紛糾を解決して貰うのである。民衆は彼に麻痺させられ、それ故に（彼自身に対する）信仰を打ち立て、（彼は）自分の利益を擁護し負担は別の人に課しているが、他の人は常にメンツが邪魔をしてあえて反対しない。[16]』」

これらに見えるように農民は自らのおかれた矛盾に気付かない。それどころか地主を尊敬し畏怖しこれに従うことが当然であると考えている。一般の農民が持つこのような地主に対する信仰が、麻痺によるものとすることはたやすい。後、荘氏が打倒される中で多くの農民が「自分は会門に騙されていた」と告白するのだが、共産党の勝利が確定した状況下ならばいざ知らず、不安定さの中にあって農民はあてにならない外来勢力よりもむしろ村落内に元々あった地主－農民間の関係を選好していた。その当時の視点に立つならば、麻痺させられているとの自覚に至るだろうか。本稿が述べてきたように地主と農民の間には一方的な人格的支配のみならず相互依存の性格も見ることが出来る。これまでその地域社会に生きてきた人々にとっては外来勢力のいかなる言説よりも、今そこにある地主の言葉がより理解しやすく人々は容易に依附するだろう。租佃関係での高い小作料という矛盾はあるが、人々は地主に対し尊敬と畏怖の感情を持っていた。またこのような生命や財産の危機に際しては地主は地域防衛の核となった。人々はここに結集して難が去るまで持ちこたえようとする。捻匪の襲来によって結集した地主－農民関係は抗日戦争という大乱にいたり、再び地域社会全体で表面化したのである。ここで紹介した日本軍、国民党、そしておそらくは共産党とも距離を置き敵対することを辞さない会門支配下の村落はその好例である。先の見えぬ状況の下で、農民は生命と財産を守るべく信頼できる人や組織に依附しようとする。それが以前より村落を取り仕切ってきた地主層であったことは怪しむに足りない。共産党の主張は当初よりすんなりと受け入れられたのではない。その端的な反応が一九三九年の失敗に見える。地主を攻撃する共産党に農民は嫌悪感を示したのである。

おわりに

本稿の内容をまとめておこう。山東省南西部の村落には、村民に強力な影響を及ぼす地主層が存在していた。筆者はこの理由が十九世紀後半の捻匪の襲来という地域社会の大混乱を契機に強固になった社会関係であると考えた。例えば、それは圩の建設の流行を表象としている。これ以前にも第二節で紹介した事例④の北汶王氏の王肇基の伝にもあるように、圩の建設は地域社会に見られた。だがこの捻匪の乱に際しては莒州に限らず広汎な地域にわたって圩が出現したのである。圩の建設とそこに拠っての防衛には地域住民の動員が不可欠である。生命の危険にさらされた人々は、生存すべく地主の下に結集した。これが当地域における強大な地主権力存立の理由であろう。さらにはこの関係は捻匪の乱の後も地域の治安が容易に回復しなかったので、民国期まで時として弛緩しつつも維持された。一九二〇年代の軍閥割拠の時期、そして抗日戦争期においてこれらは村落に根ざした極めて強い地域性を発揮し、国民党、共産党、日本軍という外来勢力に距離をとった。そこでの指導的役割を担ったのが地主層であることにはもはや贅言を要さぬであろう。根拠地を建設し自らの勢力を拡大し、抗日戦争を戦わねばならない共産党にとって、彼らは決して無条件に共存できるものではない。この両者の対立の過程は拙稿二及び別稿で論じたとおりである。最終的にはこれまで地主に従ってきた群衆自身に地主を否定させるという、闘争という方法を通じて地域社会を掌握したのである。

最後に本稿に残された課題と方向性を述べておきたい。第一に莒州と他地域の事例との比較である。捻匪や太平天国、そして抗日戦争の戦火を被った地域は広大である。この莒州という事例を以てその全てを説明することは出来ない。反乱、盗賊団の横行など地域の混乱に対処すべく圩、堡、寨を築くのはこれ以前から各地で広く見られた現象である。また十九世紀後半の太平天国、捻匪、西北地方でのイスラム教徒の反乱の時も戦火が広がる地域に地主主導の下で要塞が出現した。では他の地域では本稿で見たような地主－農民関係の強化とその維持は見いだせるのだろうか。一例を挙げよう。湖北・河南・安徽三省の交界地帯も太平天国と捻匪の害を被り、一九二七年に鄂豫皖ソヴィエト区が建設された。陳耀煌氏はこの政権に携わった地域エリートについての研究を著してい

る。これによると彼らは個人的な関係を用いて組織を拡大し、さらに重要なことには地域エリートとしての地位を利用して農民を動員したという。最終的には彼らは中共中央と対立して粛清されてしまった。[66] この事例に則して中共中央、地域エリート出身の党員、農民の三者の関係を見てみよう。地域エリートは明らかに中央とは一定の距離をおいていた。一方で彼らと農民の関係は対立的ではなく、もともとの地主－農民関係ではなかったか。また高橋伸夫氏も同根拠地の地方党幹部について、県級より上と以下とでは断絶が見られ、後者が強い地域性をもち当地の農民との関係が深かったとする。[67] 両者は決して対立的なものではなかった。残念ながら陳氏と高橋伸夫氏の研究にはこの地主－農民関係がいつ、どのようにして強固なものとなったのかについての言及はない。しかしそれが過去に被った混乱時に遡るとの推測はできよう。第二に、捻匪襲来時の地域社会内部の諸関係についてさらに考察を深める必要があろう。捻匪という外からの脅威に対抗する地域社会という構図は基本的に正しく明解である。だが、それに収斂しきれない者の存在が確認できる。荘氏の沚（紙）坊分支の荘鵬翥の伝には咸豊十一年の馬鬐山の攻防について「奸人の賊を導き襲入するあり」と書き記している。[68] 地域社会内部に賊に呼応する「奸人」の存在が確認できる。一枚岩ではない地域社会の姿の解明が今後の課題として残った。第三に、ここで明らかにした山東南部の一地域社会の像を中国村落の歴史的展開上に如何に位置づけるかという問題である。人格的支配など強制を伴う社会関係は漸次弛緩して一種ドライな関係へと移行していくのだ、と漠然と考えられている。しかし本稿の扱った村落はかつての研究の評価するような「封建制の残滓」などではない。この村落と満鉄の慣行調査の諸村落とを発展段階という同一の定規の上に排列できない。むしろ満鉄調査の村落こそがそれぞれ本来の道筋をたどって成長してきたプロセスの上に位置づけられるものであり、本稿の村落は〝近代〟における捻匪という大変動を経験してしまったが故に出現した「亜種」ではないか。この点についてはさらに議論を深める必要がある。

本稿は二〇〇三年明清史夏合宿（高知）での口頭発表の一部である。席上で、谷口規矩雄先生と吉澤誠一郎先生をはじめとする方々から貴重なコメントを頂戴しました。この場をかりてお礼申し上げます。

註

(1) 旗田巍『中国村落と共同体理論』岩波書店、一九七三年。これを発展させて内山雅生『現代中国農村と「共同体」』御茶の水書房、二〇〇三年はこのような希薄な関係にも関わらず存在する村落の「共同性」を議論しているが、それにしても共産党の資料に現れるほどの村落における地主を軸とした結集力の強さは見いだせない。

(2) ここでは紙幅の関係上研究史を網羅する事はできないが、足立啓二「清代華北の農業経営と社会構造」『史林』六四－四、一九八一年を参照されたい。

(3) 景甦・羅崙『清代山東経営地主底社会性質』山東人民出版社、一九五九年。後に羅崙・景甦『清代山東経営地主経済研究』斉魯書社、一九八五年として増補。

(4) 「併し南山東の南部では五百畝以上の土地を所有している地主はごく普通である。……。自然的結果として彼等は亦地方政治の顔役であり、経済界では地主、商人、銀行家、高利貸であり、政界では紳士であり、彼等の内の一人として県長及び諸政治部門と密接な関係を持たない者はないのである。他方、その地位を維持し、人民からの強奪の分前にあづかるため地紳と結ばない県長はないのである。」王毓銓『山東南部遊撃地区の組織』東亜研究所、一九四一年（Wang Yu-chuan,"The Organization of a Typical Guerrilla Area in South Shantung",Evans Carlson,*The Chinese Army*,Appendix,1940. の翻訳）五頁

(5) 谷光隆『東亜同文書院大運河調査報告書』愛知大学、一九九二年参照。

(6) 蝋山政道、渡辺義晴『山東湖沼群地帯の地域調査』東亜研究所、一九四一年。Kenneth Pomeranz, *The Making of a Hinterland : State, Society and Economy in Inland North China, 1853-1937*, University of California Press,1993.

(7) 莒南県は清代の莒州（一九一三年に莒県に名称変更）の南半分である。一九三九年七月莒南県が新設された。

(8) 拙稿一「清末民国期莒州大店鎮の荘氏と地域社会：咸豊年間捻匪の襲来を中心に」『人間社会文化研究』（徳島大学総合科学部）九、二〇〇二年。拙稿二「抗日戦争期中国共産党による地域支配の浸透：山東省南部莒南県」『名古屋大学東洋史研究報告』二五、二〇〇一年。

(9) 「……大店是莒南県最大的封建堡垘、地主集中、土地集中、楼院相聯、共七十二箇地主堂号、為明清両代大地主。土地号称四百八十頃、以双柳堂及知松堂各百二十頃為最多、擁有六七十箇莊子、分布於方圓百余里内、是一帯封建勢力之権威、有雄厚的封建基礎及豊富的統治経験。幾百年来、群衆被圧迫得過着猪狗不如的生活。」「中共山東分局宣伝部関於転発莒南県委《大店査減闘争総結》的通知　附：大店査減闘争総結」一九四四年十一月五日（原載『闘争生活』増刊、一九四四年十月、以下「闘争総結」と略記）『選編』十三輯、九七頁。「拠初歩調査、大店荘氏不止七十二箇堂号、現在已知道的就有一百五十多箇堂号。」荘虔玉「大店荘氏堂号考略」『莒南文史資料』三、一九九三年。『選編』は山東省档案館・山東社会科学院歴史研究所編『山東革命歴史档案資料選編』全二三輯索引一巻、山東人民出版社、一九八〇－八六年。

(10) 「一九四四－四五年山東省南部抗日根拠地における中国共産党と地主」『人間社会文化研究』（徳島大学総合科学部）十三号、二〇〇六年。

(11) それぞれ李方膺・彭甲声修、戦錫侯・陳有蓄纂『莒州志』乾隆七年（一七四二年）、許紹錦纂修『莒州志』嘉慶元年（一七九六

年)、盧少泉修・荘陔蘭纂『重修莒志』民国二五年（一九三六年、以下『民国志』と略記）を指す。

(12)「莒志始自明成化迄於清嘉慶、中間雖屢経修輯、而其内容所載、大抵沿襲旧例、無大変動、殆亦時代使然歟。」『民国志』巻首・牛介眉「重修莒志序」。

(13)「莒自清咸同以後、久無兵事、偶爾土匪竊発、旋就捕滅、間有明火劫案、官民震駭、以為巨変。蓋民不知兵者久矣。」「（民国十四年十月、軍閥の抗争が当地に波及）莒邑地処僻鄙、自有清捻匪以還、承平日久、民間乍覩兵革、莫不揣慄失措。」『民国志』巻三五「経制志・軍事」。

(14)「咸豊十一年。……。（捻匪）比聞沙溝山寨避乱者頗有富室、囲攻破之、肆行殺戮、尸積如阜、並焚其寨。……。復北攻玉皇廟民寨、山無水、囲攻三昼夜、人多渇死、寨遂不守、噍類無遺。治南馬髻山、……、近村多移家居其上、結寨繕兵以自保。……。寨遂破、屠殺無算、号泣震山谷、婦女多投澗以殉。」『民国志』巻三四「経制志・軍事」。

(15)「吾張氏族譜……自道光十九年惺堂祖続之、迄今七十余年、従無以此事過問者、加以咸同間捻匪之乱、光緒間蟲災、而吾張氏逃者、亡者、遷徙而無定処者、十之二三。」張燿緒「続族譜後跋」民国四年四月八日『重修張氏族譜』巻四。一九三六年刊。なおこの資料は国民党とともに台湾に逃れた張氏族人が一九九一年補訂の上、台湾の国家図書館に寄贈したものによった。張鍾岫『山東莒県「城陽東門裏張氏族譜」』台湾、一九九一年。

(16)「吾張氏族譜、肇修於前清康乾之際、再修於嘉慶丁巳、道光十九年、菊農惺堂諸祖三修之。毎次距離不過四五十年、故行次支派、訪査較易。」張殿禎「続修族譜綴言」民国二五年九月十日『重修張氏族譜』巻一。

(17) 中国史学会済南分会『山東近代史資料』第一分冊、山東人民出版社、一九五七年、二三二頁。

(18) Philip A. Kuhn,*Rebellion and its Enemies in Late Imperial China : Militarization and Social Structure , 1796-1864*, Harvard University Press,1970.Elizabeth J. Perry , *Rebels and Revolutionaries in North China, 1845-1945*,Stanford U.P.,1980.

(19) 谷口規矩雄「明末清初の堡寨について」『東海史学』九、一九七三。佐藤文俊『明末農民反乱の研究』研文出版、一九八五年、第一章「明末農民反乱の展開過程」。

(20)『民国志』巻五四「文献志・芸文」管廷献「咸豊南匪擾莒記」。原文は拙稿一の註五四を参照されたい。

(21)「警耗四至、城防民寨、各自為謀、不相救援、賊故得逞。」『民国志』巻三四「経制志・軍事」。

(22) おそらく一九二九年軍閥駐留軍の掠奪で没落したため地域エリートから外れてしまったのだろう。「（民国十八年二月）桂堂遂入據北杏、大肆刼掠、北杏王氏故巨族、累世所積、掃地無余。」『民国志』巻三五「経制志・軍事」。

(23) これらの宗族は『民国志』編纂スタッフを出した。また例えば大店荘氏の荘余珍、荘英、県北の管氏の管廷献は地方自治に、管象頤は治安維持に、荘厚澤は教育事業にそれぞれ携わっている。『民国志』巻首・「民国志題名」、巻二五「経制志・県政・民団之沿革」、巻三十「経制志・教育・学校・教育局之沿革」、巻六六「文献志・人物・荘余珍」。

(24)「荘瑶。……。季子錫経。……。乃同兄錫縝約族老議修村圩、為堅壁清野計。」『民国志』巻六四「文献志・人物九・名績下」。

(25)「張遵箕。……、遵箕就本村倡築圩砦、与堂姪錦悉心規画、協力出資、不加捐募。隣村助工、踴躍相属、附近避乱者至八十余村。至今崇墉屹然、城東猶恃為保障焉。」「張錦、字雲軒、遵箕堂姪也。……。捻匪之乱、出巨資協修圩砦、一方頼以安堵。」

『民国志』巻六五「文献志・人物十・耆徳上」。

(26)「于春齢。……。咸豊辛酉、捻匪北擾、捐資万余緡、築圩練勇、保障一方。」『民国志』巻六五「文献志・人物十・耆徳上」。

(27)「王肇基。咸豊十一年、皖賊入境、郷人以北汶村為前明避乱之所、議築圩以禦賊、推肇基主其事。肇基破産倡捐、並日督工、圩成而遠近奔赴者数万人。」『民国志』巻六五「文献志・人物十・耆徳上」。

(28)「先是咸豊辛酉、捻匪北擾、莒当其衝、太史（管廷献）之太翁奉政公、糾合族隣、立砦於其村東南八里之影雞山以自保。」『民国志』巻四八「文献志・張昭潜「瓶建菩薩廟碑記」」。

(29)「陳学孔。字景山、莒東車輞溝人。清咸豊間、皖匪之乱、擾及莒境、慨捐鳳凰山地数頃、勧附近各村、建築圩牆、以資守禦。咸豊十年冬、工竣、名鳳陽寨、当時頼以生存者万計。」『民国志』巻六五「文献志・人物十・耆徳上」。以下、⑪まで出典同じ。

(30)「趙訢。字春煦、邑東南趙家葛湖人。捻匪擾莒南、被害甚惨、而郷民不知防禦、空村逃亡、流離道路。村東有鶴山、蔚然聳秀、有険可守、訢乃倡修圩牆於山上、籌備防禦。剋日告成、郷隣老稚、始得庇護。」

(31)「董漢江。……。咸豊間、捻匪至、里人惶怖、謀逃避。漢江督築土堡、七昼夜而工竣、出粟二百石以贍衆。賊至入守、去則出耕、郷隣頼以安堵、無流亡焉。」

(32)「王綏之。字效宣、山頭淵村人。慷慨好施。清咸豊間、捻匪之乱、倡修圩寨、盡出家資、以為衆率、促成圩工、衆推為圩長。指揮守禦、悉協機宜。適東山玉皇頂砦潰、逃出難民、赴寨者麕集、綏之首施薪米、全活万余人。毀家紓難、郷里称盛徳焉。」

(33)「孫松。字長青、莒西後岔河村人。……。咸豊八年、捻匪竄魯、将及莒、群議修圩入保。三十里舗、城西巨鎮也、去岔河甚邇。議修圩而力不足、工幾廃、松兄弟捐金二百、工始就、又独力於本村築堡自衛。越歳匪果大至、焚殺劫掠、全境騒然、独三十里舗及岔河諸村鎮、得保全無恙。」

(34)「李膺昱。……。（咸豊）十年、奉札委督修郷圩。統計泉子牌、広袤各六十里有奇、為村百三十有二。相度地勢、約十里一圩、立圩二十有八、選各村丁壮、編為郷勇、凡五日一簡閲。」

(35)「他們都是歴来圧迫群衆的封建統治者、大悪覇圧迫着二、三十箇莊子的群衆、小悪覇圧迫着一箇莊或幾箇莊子的群衆。」「生産運動要与減租減息結合：黎玉一九四五年一月二十四日在濱海群英大会上的講話節録」一九四五年一月二四日『選編』十四輯、一六二頁。

(36) 村に圩を建設する上での難点を七つ列挙するが、そのうち四つがリーダーとしての地主の役割に言及している。中でも第一に資金のある「殷実形勢之区」を選ぶべきであるとしている点が興味深い。「堅壁清野之法、在使民結寨自衛、結寨宜村不宜山。……。然又有七難焉。立寨必擇殷実形勢之区、各村意存畛域、莫肯協力、一難也。寨必有長、烏合之衆、不帰統馭、二難也。……。主者庸懦、則号令不一、強有力者、或妄作威福、魚肉郷鄰、則人心不服、五難也。……。富者吝財、以避匿為計、灰燼之余、版築無資、七難也。」

(37) 馬場毅『近代中国華北民衆と紅槍会』汲古書院、二〇〇一年。

(38)「張士鸞。字翥卿、莒北莊家村人、光緒戊申歳貢生。……。光緒庚子之乱、邑多伏莽、士鸞倡辦民団、相度地勢、為守禦計。小舗村原有圩牆、歳久失修。衆推士鸞為圩長、捐資置器械、購木石。各村醵銭助工、日至千人、不日成之、衆情翕服。……。民国元年、又推任北汶鎮圩長、遠近帰仰、郷人以為保障。卒年九十歳。」『民国志』巻六五「文献志・人物十・耆徳上」。

(39)「民国十年左右、軍閥割拠、横征暴斂、民不聊生、土匪蜂起。先生倡議守望相助、建築囲寨、組織自衛力量、以禦匪患、其附

近富有之家、多遷入其村居住、以保安全。」李惺初『茹素道簡史』山東文献社、一九八四年、十五頁。

(40)「民国十六年、匪首史義成、糾合潰兵呉海峯等、佔拠臨沂馬蹄湖一帯荘村。時国軍囲沂、県長田立勛出走、各処荘村、均無圩寨可守、匪徒不時闖入。……。王海三睹此情形、以為勦匪方能保家、乃招集各村荘壮士、暁以利害、得百七十余人。」『民国志』巻六一「文献志・人物六・忠義」。

(41) 青島守備軍民政部鉄道部『調査資料第十四輯　南山東重要都市経済事情』一九一九年、八一頁。青島守備軍は第一次世界大戦後に引き継いだ山東省における旧ドイツ権益（膠済鉄道を中心とする）の守備の為、設置された。

(42) 前掲「闘争総結」一九四四年。中共莒南県委辦公室「大店〃荘閻王〃罪悪史」『文史哲』一九六五－四、一九六五年。

(43)「〔借〕一斗還三斗〔吃糧〕和一升還五升〔種籽〕。」李鼐「山東農村観感：紀莒県之行」第二節「佃農制度」『天津益世報』一九三四年四月二一、二八日。

(44) 前掲青島守備軍民政部鉄道部、一九一九年、一二七頁、二三六頁。

(45)「……、於是莒県的西郷和南郷一帯整箇区域都普遍的産花生了。……。在這十年価格変遷的過程中、以今年退落的為最厲害、簡直無人問津、同時一切的物品也都受了花生的影響、只是価雖便宜、可是於農民却絲毫没有好処啊！」前掲李鼐、第四節「花生和農民的生計」一九三四年。

(46)「如五六月濱海全部地区正是春荒得緊、発動借糧不但為一部分飢餓的農民所迫切要求、而且借糧救荒一般容易嬴得社会的同情。対於地主、既是有借有還、又寓救済的美名、也可不致遭受根本拒絶。」朱瑞「濱海区農民一箇月減租減息増資運動的検討」一九四二年六月『選編』八輯、三八七頁。

(47)「（一九三九年以前工作情況）第四、当時封建勢力相当濃厚、特別是魯南一帯、一般的地主都有政権、有武装、対群衆工作的開展曾形成很厳重的障碍、甚至有些頑固地主勢力一開始就是同我們的群衆工作対立的、以至直接鎮圧我們的群衆工作。」「六年来群衆工作概括総結：黎玉同志一九四三年十月在分局群工会議上的総結報告」一九四三年十月『選編』十一輯、九三頁。

(48)「又如我們土地政策、経済政策過左〔如違犯地主地権、増資不増産、減租不交租、負担過重等〕、則不但地主雇主対我懐恨、即基本群衆也会在遭受打撃〔如解租、解雇等〕之後、対我報怨。」「再如当我們鋤奸政策犯有厳重錯誤、則人心惴惴不安、反対我們的人増多、土匪会門漢奸便得以間接的滋生、根拠地不鞏固。」「中共山東分局関于執行《五年工作総結及今後任務》指示之決定　附：五年工作総結及今後任務」一九四三年八月十九日『選編』十輯、十五頁。

(49)「況且当時山区裏有種黄旗会的組織――大刀会的一種、勢力相当大、其山南西両面不遠的地方、就是他們的勢力範囲、外来的力量極難伸入。」張筠山『蒙陽絮語』山東文献社、一九八七年、九頁。

(50) 呂偉俊等『山東区域現代化研究』斉魯書社、二〇〇二年、第九章。

(51)「田副正信大佐（二六期）回想録」。防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』（一）朝雲新聞社、一九六八年、五九一頁。

(52) 前掲防衛庁防衛研修所戦史室、一九六八年、五八九－五九〇頁。

(53) 鈴木忠一『部隊戦史（一）厚い戦塵』北支派遣独立歩兵一九三大隊、一九七六年、三五九頁。同大隊は四五年五月五日に八路軍と、五月九日に国民党王洪九軍と交戦している。

(54)「敵寇進行偽化政策中、最毒辣的是実行一種変象的『並村』陰謀、誘惑威迫我根拠地中群衆搬家到敵拠点或占区附近去。企図縮小我占区、攫取我群衆、大量掠奪我資源、窒息我抗日力量、摧毀

我根拠地建設的基礎。」「粉砕敵寇変象的『併村』陰謀」『大衆日報』一九四二年十二月十一日。

(55)「敵人這次『掃蕩』、不僅是軍事的進攻、而是所謂軍事、政治、経済、文化、特務等一元化的総力戦。特務奸細分子、更是敵人『掃蕩』的先遣部隊。在敵人実行『偽化運動』的現在、奸細活動更為活躍。因此、厳防奸細活動、成為争取反『掃蕩』勝利的迫切任務。……。這等等都是奸細無恥的造謡破壊、它的企図是在於動揺威嚇老百姓投降、同時假装出一副慈善的面孔、欺騙老百姓回家、給鬼子『強化』拠点、又要利誘老百姓報告秘密、並且挑撥離間我軍民関係、分散我団結。……。」「厳防奸細活動」『大衆日報』一九四一年十二月八日。

(56)「另外還有些地主士紳、……、同時又進行種種不合事実違背事実的宣伝、加以誣蔑和破壊、対於這些不合事実違背事実的宣伝、我們也願把它一一挙出、並提出我們的見解給大家作参考。……。」「向地主士紳們進一言」『大衆日報』一九四二年六月二二日。

(57)「到現在敵人要『掃蕩』了、他們就認為是機会来了、他們就打算借敵人的力量来報仇。這種事、在臨沭已経発現了一処。」「事実上敵人会不会給我們解決問題呢？　請看看去年沂蒙大『掃蕩』時牛王廟的事吧！　七箇老人擺着酒席歓迎敵人、想敵人給他們解決問題、結果都被敵人放在火中焼死。」「三向地主士紳進一言」『大衆日報』一九四二年十月二三日。

(58)「(民国)二十七年十一月間、鬼子兵一箇大隊、約五百人、携砲二門、従這裏経過、村民厳閉寨門、不譲通行。継之開槍射撃、打死了幾箇鬼子。於是鬼子開砲向村内轟撃、発生激戦。」前掲張筠山、一九八七年、十頁。

(59)「二十七年冬……、後接輿的一位姓全的、突然糾合了一部分黄旗会衆、約百人、従山区出来、企図駆逐小山前的聯荘会。」前掲張筠山、一九八七年、十五頁。

(60) 会門の全般的な研究は路遥『山東民間秘密教門』当代中国出版社、二〇〇〇年参照。抗日戦争中の国、共、日と会門の関係については、共産党の公式見解に近い立場を取るが、張桂華「会道門組織在冀魯豫抗日根拠地的演変述略」と梁家貴「抗日戦争時期日本利用操縦山東会道門述論」参照（共に『抗日戦争研究』二〇〇三－三、二〇〇三年所収）。前掲馬場毅、二〇〇一年は一九二〇－三〇年代の共産党の対会門政策も併せて論ずる。

(61)「他們的領袖大多数是豪紳、但他們特別能够迎合農民落後的狭小的本身利益、所以他們能够很堅固的団結起来、迷信是他們団結農民的一種方法（聯荘会没有迷信比較好）。他們対於一切問題都是従本身利益出発、誰去騒擾掠奪他們、他們就反対誰、解決誰、不管你是日軍、偽軍、抗日軍隊或者政府、土匪和什么党派。他們在政治立場上是中立的。……。」劉少奇「堅持華北抗戦中的武装部隊」『解放』四三・四四、一九三八年。

(62)「独混七独立歩兵第二十九大隊第一中隊資料」防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』（二）朝雲新聞社、一九七一年、二三六頁。

(63)「地主組織会門、自居会頭。如荘英甫、荘屏舟等都是念二輩的三番子、借此蒙蔽窮人的階級認識、掩飾其剥削関係、達到統治群衆目的。会門為敵頑利用後、群衆受害更甚。」前掲「闘争総結」一九四四年、一〇五頁。

(64)「大店群衆久在地主欺騙圧迫之下、階級覚悟是不普遍的。……。翻転来又問他〝為什么地主整年整輩子不幹活、可是吃的好、穿的好、住的好呢？〟他的第一箇説法是〝人家当過大官、当初大店十二頂轎出来進去、還没錢嗎？〟第二箇説法〝人家開大買売還不発財嗎？〟最後又帰到〝人家命好呀！　祖宗……。〟当問到〝你有什么辦法没有呀？〟他的回答〝除非我去貪汚或

者当土匪！　可是我又不会。〟這雖然不能代表一般的現象、但総可以看到一般群衆的階級覚悟不明確、因之啓発群衆階級覚悟、還是基本的問題。」前掲「闘争総結」一九四四年、一一〇－一一一頁。

(65)「他（荘佐臣）説『一般説地主剥削階級、思想落後、行動保守、只知自私自利。』『精明強幹的地主、心眼很多、在郷里中有相当的身份和地位、常有人請他排難解紛、老百姓受他麻酔、所以建立信仰、掩護自私自利、負担則加重別人、別人常碍於面子不敢反対。』」丁九「記大店士紳名流座談会」『大衆日報』一九四二年六月十六日。

(66) 陳耀煌『共産党・地方菁英・農民：鄂豫皖蘇区的共産革命（一九二二～一九三二）』国立政治大学歴史学系、二〇〇二年。

(67) 高橋伸夫「根拠地における党と農民：鄂豫皖根拠地、一九三一年～一九三五年」（一）（二）慶応大学『法学研究』七三－三・四、二〇〇〇年。

(68)『民国志』巻六一「文献志・人物六・忠義」。

本稿は平成十四－十六年度科学研究費　若手研究（B）　課題番号一四七一〇二五三「抗日根拠地における〝階級対立〟と共産党支配確立の再検討：山東省莒南県大店鎮」による研究成果の一部である。

（あらたけ　たつろう　徳島大学総合科学部助教授）